阮籍と『詩経』

——四言「詠懐詩」を例として——

沼口勝

一

魏の阮籍（二一〇—二六三）、字は嗣宗が、その詩文に『詩経』を典故として用いる例は甚だ多い。そして、その典故表現の意味するところを探索する場合、今日私たちの見ることのできる『詩経』のテキスト「毛詩」によってでは、必ずしも適切な解釈を得られないことがある。これは、阮籍の学んだ『詩経』が、古文家に属する毛詩ではなく、今文家の「斉詩」「魯詩」及び「韓詩」のいわゆる三家詩のいずれかであったことに起因すると考えられる。すなわち、「毛詩」には各篇の詩の作者、時代、動機などを説明したいわゆる「小序」があるが、その説明は三家詩の遺説と往々にして差異があり、またこれに呼応して、字句の解釈にも差異が生ずるから、阮籍の学んだ『詩経』が三家詩の中のいずれかであったのであれば、彼の詩文に用いられる『詩経』の詩の篇意や字句の意味は、「毛詩」のそれによってでは解釈上齟齬を招くことが当然ありうるのである。

『隋書』の「経籍志」によれば、「斉詩」は魏の時代すでに亡び、「魯詩」は西晋に亡び、そして「韓詩」のみ独り存したが、これを伝える者は無かった、という。このことばをもって推測するに、阮籍の時代、「斉詩」は亡んで伝わらなかった疑いがあるが、「韓詩」はもとより、「魯詩」もまた遺存したのであるから、彼が「毛詩」以外の『詩経』のテクストを学んだ可能性は、時代的に見てじゅうぶん考えられるといえよう。唐の李善（六三〇—六八九?）が、『文選』に収める阮籍の五言の「詠懐詩」十七首の注釈において、「韓詩内伝」「韓詩」「薛君韓詩章句」の各書を一箇条ずつ引用することは、阮籍と「毛詩」以外の『詩経』との関連に、この著名な学者が気づいていたことを示すものではなかろうか。

ところで、周知のごとく三家詩の遺説・異文の研究は、

清朝において目覚ましい進展を遂げた。それらの遺説・異文を厖大な文献中から捜集し、三家詩の各派ごとに分類する仕事は、陳寿祺（一七七一―一八三四）・喬樅（一八〇九―一八六九）の父子二代にわたる努力により集成され、『斉魯韓三家詩遺説考』として結実した。王先謙（一八四二―一九一七）の『詩三家義集疏』は、この陳氏父子の研究の成果を詩篇ごとに一箇所にまとめて読者の便宜をはかり、かつ王氏自身の考察を付したものである。(註1)

さきに私は、阮籍の「東平賦」中に引用する『詩経』をとりあげて、これが「魯詩」に基くものであろうとする考えを述べた。(註2) 阮籍の父の瑀（？―二一二）は後漢の大儒蔡邕（一三三―一九二）に学んだ人であり、蔡邕その人は、熹平四年（一七五）楊賜・馬日磾らと諸経の本文を校定し、これを石に刻んで洛陽の太学の門外に建てたいわゆる「熹平石経」建立の中心となった人である。この石経に刻された『詩経』は、正文を「魯詩」にとり、「斉詩」と「韓詩」の異文を校記に収めていることから見れば、蔡邕は「魯詩」を学ぶ人であったと思われる。蔡邕から阮瑀に伝えられたのは「魯詩」であり、瑀は籍の幼時に逝世したとはいえ、家学としての「魯詩」を籍が学んだとする蓋然性は高いと思われる。

この小稿において私の企図するところは、阮籍の四言の「詠懐詩」中の二、三の詩を対象とし、これらの詩篇中に引く『詩経』につき、それらが「魯詩」によるものであるか否か、また、阮籍が『詩経』を典故として用いるときいかなる特徴が見られるかを、紙幅の許す範囲で究明してみようとすることである――ただし、『詩経』の各家の間に存する文字の差異及び阮籍の詩と『詩経』の作品とに見られる文字の差異については、特に言及しない――。

ところで、清の銭曾（一六二九―一七〇一）の『読書敏求記』巻四及び馮舒の『詩紀匡繆』によれば、江陰の朱子儲家蔵の旧本には、四言の「詠懐詩」十三首（馮舒は十四首とする）が収められていたという。(註3) しかし、これまでは、『全三国詩』(註4)の編者丁福保（一八七四―一九五二）の言にあるごとく、朱子儲の本の所在は不明のままで、四言「詠懐詩」は明の馮惟訥の『古詩紀』巻二十九に収める「天地」「月明」「清風」の三首のみが存するとされてきた。ところが、最近（一九八四年三月）、北京の人民文学出版社から再版された黄節（一八七三―一九三五）の『阮歩兵詠懐詩註』（一九五七年四月初版）に「補篇」として、『古詩紀』所収の三首を含む十三首の四言「詠懐詩」が、黄節の註を伴って公表された。該書の「出版説明」によれば、これらの詩及び註は、河北

大学の韓文佑氏の提供によるものだという。そして、また「補篇」冒頭には「十九年一月」の日付をもつ黄節の識語が付されてある。その文によれば、その旧蔵の潘璁本は、明の嘉靖間の刻本を崇禎間に翻刻した本で、嘉靖癸卯（一五四三）の陳徳文の序と崇禎丁丑（一六三七）の潘璁の序とをもち、上下二巻の本で、四言「詠懐詩」十三首を録するという。また、その文には、この潘璁本が『読書敏求記』にいう朱子儋本と大異なきものと思われること、そして、朱子儋本以前の本である可能性もあることが指摘されている。四言「詠懐詩」十三首が、しかも黄節の註とともに再現してくれたことは、今後の阮籍研究に大きな影響をもたらすものとして歓迎したい。

ただし、この小稿を書くに当たって私が参考にしたのは、黄節註もさることながら、大上正美氏の「阮籍詠懐四言詩三首私箋(註5)」であった。氏の詳悉的確な箋評に学ぶところが多かった。初めに記して謝意を表したい。

二

李善が五言の「詠懐詩」について下だした批評「嗣宗身仕亂朝、常恐罹謗遇禍、因茲發詠、故每有憂生之嗟、雖志在刺譏、而文多隱避、百代之下、難以情測。」というのは、そのまま四言の「詠懐詩」にも適合することばであろう。四言の十三首は、そのどの篇をとりあげても、真意の所在の測り難い作品ばかりである。最近刊行された『阮籍集』（一九七八年四月、上海古籍出版社）は、『芸文類聚』巻二十六に引く二首の四言「詠懐詩」の断片（「月明」八句と「天地」十二句）を載せるが、その「校勘記」に、これと『古詩紀』所収の完篇と思われる三首とを比較し、「（且）藝文類聚所引兩首、主題明確、詩意完整。詩紀所載三首、則主題不明確、內容蕪雜、似是將原有兩首拆成三首、又竄入若干詩句而成。」と論評している。阮詩の難解性を証する一例たりうるであろう。

そして、阮詩のかくのごとき性格は、一つには『詩経』の「興」の修辞法を用いる典故表現の難解性により付与されていると見なすことができるのである。さらに、この難解性は、作者がその真意を韜晦させる意図をもって、意識的に作りあげた修辞的技法ではなかったか、とさえいいうるように、私は思う。以下、それらの点につき、其一の「天地」の詩を対象とし分析考察を加えたい

天地絪縕（絪縕類聚作烟煴）　天地は絪縕として
元精代序　元精は代序す
清陽曜靈　清陽は霊を耀かし
和風容與（風類聚作氣）　和風　容與たり

明日映天　　明るき日　天に映じ
甘露被宇　　甘露　宇を被ふ
蓊鬱高松　　蓊鬱たる高き松
猗那長楚　　猗那たる長楚
草蟲哀鳴　　草蟲は哀鳴するに
鶺鴒振羽　　鶺鴒は羽を振ひとぶよ
感時興思　　時に感じて思ひを興し
企首延佇　　首を企げて延び佇む
於赫帝朝　　於赫なるかなわが帝朝
伊衡作輔　　伊衡のごときひと輔を作す
才非允文　　わが才允に文あるに非ず
器非經武　　わが器武を経むるに非ず
適彼沅湘　　彼の沅と湘とに適き
託分漁父（分類聚作介）　分を漁父に託さん
優哉游哉　　優なる哉　游なる哉
爰居爰處　　爰に居り　爰に処らん

右の詩について、大上氏はその「私箋」に次のごとく解釈される。

「其一の詩は、表面上は魏朝を輔佐する司馬氏を讃美しながらも、阮籍自身は無用の存在として、権力者と時代とから距離を保とうとする。ストレートな司馬氏批判が現実的には全く無力でしかありえぬ情況を生かされている以上、屈原の悲憤を超え、志を漁父に託して欣然と自適の境地を楽しむということのなかに、かろうじて反時代的立場を表白する道を見出しているかに見える。しかも表現に於いても韜晦をして。其一の詩からは、そのように、阮籍と権勢との屈折した関係が浮かび上がってくるであろう。」

大上氏の右の文章を、私は、阮籍が司馬氏の権勢に対し韜晦の姿勢と表現とにおいて批判することを明らかにした、すぐれた見解だと考える。私の解釈もまた、大上氏のそれとほぼ同じところにあるので、敢て引用させていただいた。

さて、ここで私が問題としてとり上げるのは、詩の前半部、ことに第七―第十句に見られる『詩経』を用いた典故表現である。

まず、冒頭から第六句までの内容を概観するならば、ここは、天地の陰陽の気の盛んな作用により、万物が化生し、調和と豊潤な恵みに満ちるめでたき世界をいうのである。その世界は、あるいは渾沌の太始の時世を象徴するとも考えられる。なぜならば、「和風」の語が、同じ作者の「大人先生伝」に、大人先生が「其の万天に登りて通観し、太始の和風に浴し」たと述べられているからである。この六句は、

おそらく作者の若き日に遭った魏朝の盛時を回顧し、これを太始の時世に喩えて述べるものであろう。そして、かくめでたき時世に相応しいすぐれた人の存在を、『詩経』の「興」の技法により詠うのが、第七・八句である。

第七句「翳鬱高松」の「高松」という語は、五言「詠懐詩」其二十九に「澤中生喬松、萬世未可期」と詠う、その「喬松」と同じ意味の語である。そして、その詩における「喬松」の語は、作者にとって惆悵しつつ念う故時の人、沢中に喩えられる悪しき時世に生きなければならなかったあるすぐれた人を暗喩すると思われる。このように「喬松」をすぐれた人の象徴として詠う『詩経の』例は、鄭風の「山有扶蘇」に求められる。その第二章に「山有橋松、隰有游龍、不見子充、乃見狡童」という。その「橋」の字について『経典釈文』は、「喬」に作るテクストがあり、また、魏の王粛が「高也」と訓ずることを注意する。残念なことに、「山有扶蘇」の詩についての三家詩説は遺存しないが、毛序は昭公姫忽の人を見る眼のないことを刺譏する歌とし、鄭箋は「山有橋松、隰有游龍」の句について、「游龍猶放縦也、橋松在山上、喩忽無恩澤於大臣也、紅草放縦枝葉於隰中、喩忽驕恣小臣、此又言其養臣顚倒失其所也。」と説く。今、煩瑣を避けるために、細かな論証の過程は述べないが、王先謙によれば、この詩の第一章は斉・魯・毛各家の文義は並びに同じいといい、また、第二章の「狡童」を毛伝が昭公に当てるのは斉詩説を承けるものという。この詩に関していえば、毛序・毛伝・鄭箋の解釈と斉・魯二家詩のそれとは、さしたる逕庭が無かったとしてもよいと思われる。これを要するに、「山有扶蘇」の「橋(喬)松」はすぐれた人を象徴する語であり、阮籍はこれを「澤中生喬松」「翳鬱高松」の二句に用いたとすることがいえよう。第七句は、一見『詩経』を引かぬかに扮しているが、実は「山有扶蘇」の詩に基くのであり、対句をなす次の第八句と同じく「興」の技法をとるものである。

それでは、第八句「猗那長楚」の解釈につき、次に検討を加えたい。この句は、檜風の「隰有萇楚」に、「隰有萇楚、猗儺其枝、夭之沃沃、樂子之無知」(第一章)というのを典拠とするであろう。この詩についても、残念なことに三家詩の遺説はなく、ただ毛序の、国人がその君の淫恣を疾んで情慾なき者を思う歌とする説のみがある。そして、毛伝は「興也、萇楚、銚弋也、猗儺、柔順也。」といい、鄭箋は、それを「銚弋之性、始生正直、及其長大則其枝猗儺而柔順、不妄尋蔓草木、興者、喩人少而端慤則長大無情慾。」と敷衍している。ところで、陳喬樅はこの詩についての魯

詩説として、「萇楚、銚弋」（「釈草」の文）「知、匹也」（「釈詁」の文）の二箇条を挙げており、これらは毛伝・鄭箋と一致するから、この詩に関しても魯・毛二家詩間にさしたる解釈上の隔たりがなかったと見なしうる。これを要するに、「隰有萇楚」の詩の「萇楚」は、きまじめで淫らなところのない人を象徴する語であり、阮籍の「猗那長楚」の句も、このような古注の解釈に従うものと考えられる。

以上の検討によれば、第七・八句は、今は亡きすぐれた高潔なある人を暗喩する表現と見なしてよいと思われる。作者がかつて遭った良き時世とすぐれた人とを回顧するのが、冒頭から第八句までの内容と考えられるが、これを受ける第九・十句「草蟲哀鳴、鶴鵙振羽」は、『詩経』のいかなる篇のいかなる「興」の技法を用い、そしていかなる意を詠うものであろうか。それを次に検討したい。

まず、第九句の「草蟲」の語の典拠としては、召南の「草蟲」と小雅の「出車」の二篇を挙げることができる。「草蟲」の詩の第一章の文を示せば、「喓喓草蟲、趯趯阜蟲、未見君子、憂心忡忡、亦既見止、亦既覯止、我心則降。」というものであり、また、「出車」の詩の第五章の文は、「喓喓草蟲、趯趯阜蟲、未見君子、憂心忡忡、既見君子、我心則降、赫赫南仲、薄伐西戎。」というものである。この二篇の文は、一見して明らかなように、五句にわたって同じ文を重ねており、きわめて類似する表現をもっている。そして、このことは、阮詩の「草蟲哀鳴」の句の典拠を、「草蟲」・「出車」二篇のいずれに求めるかということについて、読者にある躊躇をもたらす効果を有するであろう。なお、ここで「出車」の第六章の文に、「春日遲遲、卉木萋萋、倉庚喈喈、采蘩祁祁。」とあり、阮詩の「鶴鵙振羽」の句に繋がる可能性のあることを注意したい。次に各家の詩説につき検討しよう。「草蟲」の詩について、毛序の説は、大夫の妻のよく礼を守り、妻として恥じることのないよう戒める歌とする。毛伝は、「喓喓草蟲、趯趯阜蟲」の句につき、「興也、……卿大夫之妻、待禮而行、隨從君子。」と説く。また、鄭箋の解釈は、「草蟲鳴、阜蟲躍而從之、異種同類、猶男女嘉時、以禮相求呼。」という。要するに、毛序・毛伝・鄭箋の古文家の解釈は、この二句を、男女の嘉会にも礼を忘れぬことを象徴する「興」の表現と捉えているのである。ところが、陳喬樅が魯詩説として挙げる劉向の『説苑』君道篇の文、それは魯の哀公に対えた孔子のことばであるが、そこでは次のようにいう。

惡惡道不能甚、則好善道亦不能甚、好善道不能甚、則百姓之親之也、亦不能甚、詩云、未見君子、憂心惙惙、亦

既見止、亦既覯止、我心則説、詩人之好善道之甚也、如此、哀公曰、善哉、吾聞君子成人之美、不成人之惡、微孔子、吾焉能聞斯言也哉。

陳喬樅は、右の『説苑』の文に拠り、「魯詩」の説と「毛詩」の説と異なることを指摘し、さらに『左氏伝』襄公二十七年に、晋の趙孟（武）の請いに応じ、鄭の子展（公孫舎之）が「草蟲」を賦したとき、趙孟が「民之主也、抑武也不足以當之。」といい、後にまた「子展其後亡者也、在上不忘降。」と評したことをとり上げ、『説苑』の君子は善道を好むとする説と意旨の相い合致することを論じている。私見によれば、「草蟲」の詩義を、君子の善道を好み悪道を悪むにあるとする魯詩説は、阮詩の「草蟲哀鳴」の典拠として、最も相応しいとすることができる。すなわち、「草蟲」がなにゆえに「哀鳴」するかといえば、「未見君子、憂心忡忡」のゆえにであり、その君子とは、善を善とし悪を悪とする人を意味するものであろう。この解釈は、「出車」の詩に対する諸説が、帰還した将帥を慰労する歌（毛序）、将帥と兵卒とでは戦役中は一心同体で何事も同じ扱いであるが、帰還して慰労するときは尊卑の別を設けることをいう歌（鄭箋）、周の宣王が戎狄征伐の実を挙げた功を美する歌（『漢書』匈奴伝―斉詩説）、そして、周の宣王が南仲吉甫に獫狁を攘い、蛮荊を威圧することを命じ、吉甫が凱旋して祝宴をもったことをいう歌（蔡邕の「難夏育請伐鮮卑議文」―魯詩説、また、鄭箋）などとするのと比較して、阮詩の典拠とするにより相応しいであろう。

結論的にいうならば、阮籍は、「草蟲」の詩を典拠とし、「未見君子、憂心忡忡」の意を「草蟲哀鳴」の句に象徴させたのである。「出車」の詩は、作者が真の典拠を隠すためのカムフラージュ、いわば擬装典拠であったと考えられる。次に第十句の検討に入ろう。

第十句「鶴鳴振羽」と類似する句をもつ『詩経』の詩を求めるならば、すでに挙げた「出車」の詩の「倉庚喈喈、采蘩祁祁」という句、幽風の「七月」の詩の第二章に「春日載陽、有鳴倉庚」という句、そして、同じく幽風の「東山」の詩の第四章の「倉庚于飛、熠燿其羽」の句の三詩であろう。そして、この中で表現の類似という点から見て、「東山」の詩が典拠として最も相応しいと判断される。「東山」の第四章の文は、次のようである。

我徂東山、慆慆不歸、我來自東、零雨其濛、倉庚于飛、熠燿其羽、之子于歸、皇駁其馬、親結其縭、九十其儀、其新孔嘉、其舊如之何。

「東山」の詩について、毛序と鄭箋との間には多少の差

異こそあれ、周公が殷の遺民とこれを治める武庚、管叔・蔡叔等のいわゆる三監を誅滅または放逐し、また淮夷の叛乱を討伐し、凱旋することを詠った歌とする大筋においては同じである。『易林』の文に遺された斉詩説を陳喬樅は挙げているが、断片的な文で精確な意は測りえないが、乱を拯うとか、家居の婦が役にある夫を思うとかのことばからすると、おそらくこの斉詩説も毛序・鄭箋の解釈と同じ線上にあるものと察せられる。そして、韓・魯二家の説の遺存しないのも、「東山」の詩についてはその伝承に差異がなかったことを、かえって証するものであろう。

それでは、第四章の「倉庚于飛、熠燿其羽」の句についての鄭箋を見ることとしよう。

倉庚仲春而鳴、嫁取之候也、熠燿其羽、羽鮮明也、歸士始行之時、新合昏禮、今還、故極序其情、以樂之。

すなわち、遠征に発つ時、新妻を残して行った兵士が帰還に際して妻と会える喜びを詠う句であると、鄭箋はいう。羽を鮮明に輝やかし飛び立つ倉庚は、凱旋する兵士の喜びの感情を象徴する表現である。阮詩の「鶴鳴振羽」が「東山」の詩のこの二句に拠るものとすれば、当然その句もまた凱旋する兵士の喜びを象徴する表現としなければなるまい。

ここに至って漸く私たちは、「草蟲哀鳴、鶴鳴振羽」の二句の「興」の所在を解くことができた、というべきであろう。一方は、失われたよき時世とすぐれた人を回顧して哀しむ作者の姿、そして他方、凱旋した兵士らの喜びの姿が詠われている。そこに、その戦勝に対する作者の深い怨憤の目差しの隠されていることを、私は感じるのである。そして、その怨憤の感情を懐きつつ時世を哀しみ、思いを募らせ、明るさを希求して展望を試みることをいうのが、次の「感時興思、企首延佇」の二句である。しかし、阮籍がそこに見たものは、「於赫帝朝、伊衡作輔」とことばでは賛美してみせるものの、その実は、司馬氏の権勢の下で気息奄奄たる末期の帝室と簒奪者司馬氏との姿であった。作者は、「才非允文、器非經武」と謙遜を装いつつ、司馬氏への加担を避け、末尾四句に表明するごとく、隠遁への道を志向してこの詩を終えるのである。

なお、穿鑿に陥るかも知れないが、第十句の「興」の所在から推測するならば、そこに暗示されている凱旋の事がらは、甘露三年（二五八）二月に鎮圧された、淮南に拠る諸葛誕の叛乱の際のものかと、私は思う。『晉書』によれば、京師への司馬昭の凱旋はその年の四月のことであったという。(註6)

三

この項では、四言「詠懐詩」其三をとり上げ、検討を加えたいと思う。左にその文を掲げる。

清風肅肅　俯夜漫漫　嘯歌傷懐　獨寐寤言　臨觴拊膺　對食忘餐　世無萱草　令我哀歎　鳴鳥求友　谷風刺愆　重華登庸　帝命凱元　鮑子傾蓋　仲父佐桓　河濱嗟虞　敢不希顔　志存明規　匪慕彈冠

清風　肅肅たり　俯夜　漫漫たり　嘯歌しては懐ひを傷ましめ　独り寐ねては寤めて言ふ　觴に臨んでは膺を拊ち　食に対しては餐を忘る　世に萱草無し　我をして哀歎せしむ　鳴く鳥すら友を求むといふ　「谷風」のうたは愆ちを刺る　重華（舜）　登庸し　帝は（八）凱と（八）元とに命ぜり　鮑子は蓋を傾け　仲父は桓を佐けり　河浜に虞（舜）を嗟く　敢へて顔（回）を希まざらんや　志は明規に存し　弾冠を慕ふに匪ず　我心伊何

我が心　伊れ何ぞ　其芳若蘭　其の芳しきこと蘭の若し

大上氏の「私箋」の評を、ふたたび引用させていただこう。氏は次のごとくいわれる。

「其三の詩は、暗さが全篇をおおい、重苦しい。ここでも阮籍の立場は微妙である。冒頭から続く憂思は、孤絶の故である。表面的には時代はあたかも舜が才能ある人士を登庸したよき時代かのように言いながら、それでいて、阮籍自身は孤高を守り身を遠ざけることを表明する。人間不信と悪のはびこる時世に生きる苦しみと悲しみとが浮かび上がってくる詩である。」

大上氏の評は、作者が表出しようとしたその微妙な立場と苦渋に満ちた感懐とを、的確にいい当てていると思う。そこで私としては、大上氏がその「私箋」で言及されなかった一点につき、私見を述べたい。

それは、詩の第九・十句「鳴鳥求友、谷風刺愆」と「魯詩」の遺説とが、はたして適合するか否かという問題である。しかし、その検討に入る前に、大上氏の『詠懐』其一とも通底する熱くとぐろまく憂思を歌う」と評される、冒頭から第八句までの内容に触れておきたい。

この八句は、秋夜憂思することを詠っているが、憂思す

る理由は、作者によって隠されている。隠されている憂思の理由は、おそらく典拠とする『詩経』の詩篇の中に、ぼんやりとではあっても示されている、と私は推測する。

たとえば、「嘯歌傷懐」の句は、小雅の「白華」の第三章「嘯歌傷懐、念彼碩人」を用いるが、これによって推論すれば、作者が嘯歌傷懐するのは、彼の碩人を念うがためにであろう。そして、この碩人から連想した詩が衛風の「考槃」の第一章「考槃在澗、碩人之寛、獨寐寤言、永矢弗諼」であり、ここから「獨寐寤言」の句が借用されたのであろう。すなわち、この二句は、作者によって碩人と意識されるような誰かを追懐悲哀することを詠うものであろう。その人は、作者の友であったかも知れない。そう考える理由は、蔡邕に友人を碩人と美称する詩句の例（斌斌碩人、貽我以文「答卜元嗣詩」）があるからである。

さて、次の第五・六句はいかなることを詠うものであろうか。「臨觴拊膺」の句は『詩経』を典拠とはしない。この句に示されている執拗につきまとう憂思の理由は、むしろ五言「詠懐詩」其三十四の「臨觴多哀楚、思我故時人、對酒不能言、棲愴懐酸辛、……愁苦在一時、高行傷微身、曲直何所爲、龍蛇爲我隣。」と詠う中に求められるであろう。すなわち、第五句は、高き行いのために身を傷ったかつての友への哀歎を詠う、と私は思うのである。それでは、続く第六句のことばの底に隠されているものは何か。私見によれば、もしも「對食忘餐」の句が、鄭風の「狡童」の第一章「彼狡童兮、不與我言兮、維子之故、使我不能餐兮」に拠ると認められるならば、魏朝の天子または大臣の誰かを指す可能性も考えられよう。その根拠を示すならば、毛序にこの詩は、昭公姫忽が賢人を遠ざけ、ために権臣が勝手に政治を動かしたことを刺った歌といい、鄭箋、毛伝も狡童は昭公を指すとするからである。なお、毛伝の「昭公有壮狡之志」という点につき、清の胡承珙（一七七六―一八三二）は、「壮狡」とは「雄武」というに同じく、昭公が政治的情熱に富むことを毛伝はいうのであって、理に悖る意にとるのは誤りだ、と論じている。(註7) 第八・九句「世無萱草、令我哀歎」は、衛風の「伯兮」の第四章「焉得諼草、言樹之背、願言思伯、使我心癆」という、その「諼草」の語と章旨とを借り、念う人への哀歎の情を訴えるものであろう。

このように冒頭から第八句までに詠われている憂思の理由は、権臣司馬氏による魏朝簒奪の渦中に呑みこまれ殺されていった友への追想、そしてあるいは天子にまつわることであるかも知れない暗い追想にある、と私は思う。それでは、かかる文脈において第九・十句と「魯詩」の遺説と

の関わりはどのようであろうか。次にそれを検討しよう。

小雅の「伐木」の第一章の文を左に掲げる。

伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出自幽谷、遷于喬木、嚶其鳴矣、求其友聲、相彼鳥矣、猶求友聲、矧伊人矣、不求友生、神之聽之、終和且平。

また、同じく小雅の「谷風」の第一章の文は、左のごとくである。

習習谷風、維風及雨、將恐將懼、維予與女、將安將樂、女轉棄予。

阮詩の「鳴鳥求友」の句は、「伐木」の詩を典拠とし、また、「谷風刺徳」の句は、「谷風」の詩を典拠とする。ただしこの二句は、後者が「谷風」のうたは徳を刺るという意であることに明らかなごとく、本来、『詩経』の篇名を挙げその一篇の意をいうかたちのものである。したがって第九句は、本来、「伐木求友」の文であるはずであるが、対句を構成するための配慮から「鳴鳥求友」としたものと考えられる。

さて、篇意が問われているのであるから、次に「魯詩」の遺説から見てゆくこととしよう。

まず、「伐木」・「谷風」の魯詩説として陳喬樅の挙げる蔡邕の「正交論」の文を見ることとしよう。

（是以）古之交者、其義敦以正、其誓信以固。逮至周徳始衰、頌聲既寢、伐木有鳥鳴之刺、谷風有棄予之怨、其所由來、政之缺也。自此已降、彌以陵遲、或闕其始終、或彊其比周。（後漢書・朱穆伝注引）

『後漢書』朱穆伝によれば、蔡邕は朱穆の「絶交論」の主旨を正しく世人に広めるため「正交論」を書いたのだという。

さて、この文に見える蔡邕の説は、周の徳政が衰微するにつれ、太平を寿ぐ歌声が止み、代わって友情や信頼を捨てて顧ない世態人情を刺譏し怨歎する「伐木」や「谷風」の歌が起こった、そして、これはすべて政治の道徳的欠陥に由来する、というのである。これによれば魯詩説では、「伐木」をかつての友情を顧ない出世した者に対する刺譏の歌、また、「谷風」をかつて苦労を共にしたことを忘れ安楽をひとり占めする者に対する棄てられた仲間の怨みの歌とすることがわかる。なお、朱穆には「崇厚論」という文章があり、本伝に載せるが、それにも「斯蓋谷風有棄予之歎、伐木有鳥鳴之悲矣。」という。朱穆も「魯詩」を学ぶ人であったと思われる。そして、「魯詩」においては、「伐木」と「谷風」とを人間不信の世相を刺譏怨歎する一対の歌として考えていたと推測される。

「谷風」に対する魯詩説の例を一つつけ加えよう。それは、後漢の王符『潜夫論』の交際篇の一節である。

夫以踰疎之賤、伏於下流、而望日忘之貴、此谷風所爲内摧傷、而介推所以赴深山也。

かつて親交のあった者でも、貴賤の階級を異にしてしまえば、賤者は疎隔され忘れられる、その賤者の悲傷の情を詠うのが「谷風」の歌だと、右の文はいう。蔡・朱の文に見えた「谷風」に対する解釈とひとしいとすることができる。

こうして、魯詩説が明らかになったから、次に「伐木」・「谷風」の詩についての韓・斉・毛の各家、及び鄭箋の説を、簡単に見ることとしよう。

陳喬樅が「伐木」の韓詩遺説として挙げるのは、『文選』巻二十二謝混「游西池詩」の李注に引く、「韓詩曰、伐木廢、朋友之道缺、勞者歌其事、詩人伐木、自苦其事、故以爲文」の文、同じく巻十六潘岳「閑居賦」の序の李注に引く、「韓詩序曰、勞者歌其事」の文、そして、『初学記』巻十五、及び『太平御覧』巻五百七十三に引く、「韓詩曰、饑者歌食、勞者歌事」の文である。これらはみな「韓詩」の序の文であろうが、王先謙の指摘するごとく断片的に過ぎ、一貫した意味をとらえることができない。

しかし、「韓詩」を学んだとされる魏の曹植（一九二―二三）の「求通親親表」に、「谷風」とともに「伐木」の詩を引く一節があり、韓詩説を窺う上で補益するところがあろうかと思われるので、次に検討を加えたい。

遠慕鹿鳴君臣之宴、中詠棠棣匪他之誡、下思伐木友生之義、終懷蓼莪罔極之哀。（略）竊不願於聖代使有不蒙施之物、有不蒙施之物、必有慘毒之懷、故柏舟有天只之怨、谷風棄予之歎。

前述の「朋友之道缺、勞者歌其事」という「韓詩」の序の文と、ここに「下思伐木友生之義」とあるのを併せ考えるならば、「伐木」の韓詩説は、おそらく卑賤の者から高位の者に対し、友誼を忘れず友としての信義を守ることを訴える主旨のものであったであろう。とするならば、韓詩説は魯詩説に近いとせねばならない。

卑賤の者が高位の者に向けて刺譏する歌とする魯・韓二家の詩説に対し、「伐木」を為政者の歌とするのが、「斉詩」及び毛序・毛伝・鄭箋の解釈の方向のごとく見受けられる。

陳喬樅によれば、『易林』「夬之震」に「君明臣賢、鳴求其友、顯德之政、可以履事」とあるのが斉詩説であるが、この文からすれば「伐木」は、明君が賢臣を求めることを

いう歌となろう。

毛序は「伐木」を、朋友故旧を燕（宴）する歌とし、次のごとくにいう、

自天子至于庶人、未有不須友以成者、親親以睦、友賢不棄、不遺故舊、則民德歸厚矣。

為政者が自ら友愛の道を実践し、賢者・故旧を友とするならば、民の道徳も質実に向かう、というのである。また、毛伝は、「嚶其鳴矣、求其友聲」の句について、「君子雖遷於高位、不可以忘其朋友」と説き、鄭箋はこれを「嚶其鳴矣、遷處高木者、求其友聲、求其尚在深谷者、其相得則復鳴嚶嚶然。」と説く。毛伝はこの詩を「興」と見なし、鄭箋は「賦」と見なしている。今、鄭箋はこの詩を「賦」の技法によるとすることを述べたが、その解釈の大要をいえば、高位にある者がかつて農に従っていた頃、山中で友と木を伐る労苦を共にし、互いに徳をみがいたことを想い、今その友をその志に沿って登用し、功を分け合おうとする歌であることになる。

最後に、「谷風」についての毛序・毛伝・鄭箋の説を検討しよう。なお、斉・韓二家の遺説はない。また、魯詩説についてはすでに述べたとおりである。

毛序は「谷風」の詩を、幽王を刺る歌とし、「天下俗薄、朋友道絶焉」という。幽王の政治の頽廃が世俗の軽薄を招き、友誼の正しい道が廃絶したのを刺る歌とするのである。毛伝は、この詩を「興」の技法によるものとし、風雨が相感じ合うごとく、朋友も相待つものであるとする。そして、「將安將樂、女轉棄予」の句につき、朋友が利に趨（はし）り、ために窮する者と栄達した者の友誼が放棄されたと説く。また、鄭箋は、毛伝の「言朋友趨利、窮達相棄」ということばを、「朋友無大故、則不相遺棄、今女以志達而安樂、棄恩忘舊、薄之甚」と敷衍する。よほどのことがない限り友を棄てるべきではないのに、今汝は自らの栄達安楽に思いあがり、かつての恩を忘れ友を棄てるとは、何と軽薄なことであろう、というのが鄭箋の意である。「谷風」に対する毛伝・鄭箋の解釈は魯詩説に近いといえよう。

以上、煩瑣な詩説の検討を試みてきたが、阮詩の「鳴鳥求友」の句に最も適合する「伐木」の解釈は、魯・韓の詩説であろう。政治の道徳的欠陥が友情の崩壊をもたらし、友の背信と孤独に苦しむ者が、鳴き交す鳥を見て人の世のあり方を刺った、とするのが、それらの説であり、為政者（君子）の立場から友情の重要さを説く「斉詩」・毛序・毛伝及び鄭箋の説より適切と思われる。また、「谷風刺徳」の句に合致する解釈は、どの説をとってもよいかに思われ

る。強いて難のある説をあげれば、毛序の「幽王を刺る也」と限定している点が問題となるであろう。阮詩の二句は、道徳の頽廃と人間不信がすでに古代に始まることを、広く一般化したかたちでいうにすぎないからである。

右の考察によっても、魯詩説は諸家の説の中で、阮詩ともっとも無理なく適合するように思われる。前項で検討したことがらも含め、阮籍は『詩経』を「魯詩」によって用いている、と断定してよいように思うのである。

四

四言の「詠懐詩」十三首に詠われている内容は、かなり多岐にわたっている。表面上朝廷を頌歌するが実は裏に皮肉の意をこめるもの、時間の経過循環の速やかなことをいい、繁華の久しからぬことを悲しむもの、人命の短促をいうもの、世態人情についていうもの、君子の生き方について いうもの、自己の生き方・隠遁への志向をいうもの、神仙の否定を述べるもの、などを数えあげることができるが、その外に、往古を追慕傷懐することを詠うものがある。そして、この往古を追慕傷懐することを詠うものは、司馬氏の権勢の下で生きる作者にとって、身の危険を伴うことであったから、勢い隠微な表現をとらざる得なかった。『詩経』の語句とその「興」の技法を借りる方法が、ここに用いられることになった。これは他の詩人たちも用いる方法ではあるが、阮籍の場合は、徹底してわかりにくく隠微である。典拠が何の詩篇によるかさえ曖昧にしようとする。また、典拠とする詩篇全体の解釈を取りこもうとする。

私がここで試みた考察は、右に述べたような阮籍の『詩経』の用い方を明らかにしようとしたものである。また、阮籍の学ぶ『詩経』が、「毛詩」や「韓詩」でなく、「魯詩」であることを検証した。この検証はまだじゅうぶんでないが、「魯詩」を阮籍が学んだとすることは、ほぼ断定してよいように思う。黄節は四言「詠懐詩」其七の註で斉詩説をとりあげているが、おそらく見当外れであろう。今後は「魯詩」の遺説に拠って、阮籍の作品を読む試みがなされる必要があると思う。

〔註〕

(1) 武内義雄著『燕京読書記—清朝学術史—』の「一五 道・咸以後の学(一)—後漢より前漢へ」(『全集』第十巻「雑著篇」角川書店)、小川環樹著『中國語學研究』の「第一部 音韻史考説」の「一 詩經異文の音韻的特質」(創文社〔東洋學叢書〕昭五二年)参照。

(2) 「阮籍の『東平賦』について」(『日本中國學會報』第三十六集 昭五九年)参照。

（3）『讀書敏求記』巻四に「阮嗣宗詠懐詩行世本、惟五言八十首、朱子儋取家藏舊本、刊于存餘堂、多四言詠懐十三首、覽者勿漫視之。」という。また、『詩紀匡謬』には、「阮籍咏懐　四言共十四首、江陰朱子儋本尚有之、今竝删去何也。」という。なお、このことについては、吉川幸次郎氏の「阮籍の『詠懐詩』について」（上）の「一」に詳しい。「中國文學報」第五冊（一九五六年十月、京都大学文学部中国語学中国文学研究室）参照。

（4）『全三國詩』巻五「魏　阮籍　詠懐詩三首」に「余歷訪海上藏書家、都無朱子儋本、今所存四言詩三首耳。」という。

（5）『加賀博士退官記念　中國文史哲學論集』（加賀博士退官記念論集刊行会　昭五四年、講談社）所収。

（6）『晉書』文帝紀に「（甘露三年）夏四月、歸于京師、魏帝命改丘頭曰武丘、以旌武功。」という。

（7）『毛詩後箋』巻七に「此傳云壯狡之志、則又非徒形貌、高注呂覽云壯狡多力之士、是壯狡與雄武意略同、昭公志自奮而所與圖者非其人、故惟有壯狡之志而闇于事機、終將及禍、愈使人思其故而憂之、至不能食息焉、然則謂毛以狡童目昭公爲悖理者、皆不達古人之文義者也。」とある。